

## 日系人の心に生きる「後藤澗」

小川 はつこ

(1)  
「オカアサン イッタ（言った）、カツ  
カワイソウ カワイソウ」

マサは、たどたどしい日本語でそう言った。彼の名前は、マサヨシ西森。八十五歳の日系四世で、「わたしはアメリカ人だから、アメリカ式にマサと呼んでくれ」と英語で話す。

彼のお母さんが「かわいそう」と言った「カツ」とは、日本からハワイ王国への第一回官約移民としてハワイ島に渡り、非業の死をとげた後藤澗（かつ）のことである。

今年（二〇一九年）三月。後藤澗の墓があるハワイ島ハマクアの浄土院を訪れた。ここは無住の寺で、マサはボランティアで寺の管理をしている信徒さんだ。ハマクア浄土院へ行くならマサに会えと、幾人もの人に教えられたぐらい島内の有名な人だ。

ハワイ島には七年前から何度か訪れていたが、そのたびに心を引かれるのは日系人にかかわる文化や歴史だった。各種ミュージアムはもちろん、島内に点在する日本人墓地や移民が多く住んだ町を巡ったりもしてきた。日本に帰ると、移民に関連する本やネットを使って調べた。その中に出てきたのが、後藤澗の名であった。第一回官約移民でハワイ島に渡り、耕地労働者からハワイ初の日本人店主となった彼は、当時としてはめずらしく英語が話せたという。経営する店は繁盛するが、ある事件で命を落とすことになる。彼に興味をもった私はもっと詳しく知りたいと思ったが、日本で手に入る情報は限られており、しかもみな同じようなものしかなかった。そこで、澗の墓があるハマクア浄土院に行こうと思い立った。そこに行けば、彼を知るための手がかりに出合えそうな気がしたのだ。

そのハマクア浄土院を初めて訪れたのは、三年前になる。寺の場所が分からなかったので、まずはホノカアの町からスタートした。ホノカアは、澗が商店を開き、そして最期を迎えた町である。そこには、毎年彼の法要を行っている寺がある。ホノカア本願寺だ。この寺は幹線道路沿いにあるので、場所は知っていた。澗に関するのなら何でも知りたくて訪問したのだが、ご住職の古澤伸吾師によると、供養会は行っているものの彼に関する資料等は寺にない、とのことだった。古澤師は、町外れにある澗の祈念碑に案内してくれた。九年前に建てたものだという。私の背丈とほぼ同じ高さのささやかな碑ではあるが、日本瓦の屋根に守られている。屋根を支える柱は、ハワイの木コアと松である。澗が営んだ商店にはど近く、彼が最期をむかえた場所とは数メートルしか離れていない。碑の造りといい場所といい、日系人の思いが込められているようだった。

古澤師は、そこからハマクア浄土院までの地図を書いてくれた。距離にすれば三、四キロだが非常にわかりにくい場所

にあるそうで、途中で分からなくなつたら電話をして下さいと、ご自分の電話番号も記してくれた。

地図のおかげで何とかたどり着いたハマクア浄土院は、幹線道路から脇に入った細道を進んだ先の、未舗装路の行き止まりにあつた。周辺は、かつてのサトウキビ・プランテーションの跡だろうか。背の高い植物（おそらく野生化したサトウキビ）に被われた荒地である。境内はきれいに整備され、周囲に植えられた花や実のなる木が大きく育つていた。寺の屋根は日本の寺と同じ様式で、本堂の左右に庫裏や集会所が続いている。本堂が高床式になっているのも日本と似ている。潤の墓は、建物の背後に隣接する墓地にあつた。

傾斜地に、百を超えると思われる墓石が新旧立ち並ぶ。潤の墓は、やや下手に建つていた。嘉屋文子さんというハワイ島生まれの女性が、一九六六年に再建した白い大理石のものだ。再建前の崩れた小さな墓石も並べられている。嘉屋さんは潤の戸籍上の姪にあたる。潤が亡くなつた後に彼の店を継いだ、弟の養女だ。潤

の墓は墓地内で特別立派なわけではないが、たくさんの花が手向けられていた。残念ながらその年は、マサどころか誰一人の姿も見かけずに寺を後にした。収獲は潤の墓を見つけ墓参できたことと、祈念碑の前に立つたことだけだつた。ハマクア浄土院には翌年にも二度訪れたが、いつも無人だつた。だから、今回やっと会えたマサだつたのだ。

ところで、潤の墓はハマクア浄土院にあるのに供養会はホノカア本願寺で行われていることが、私には奇妙に思われた。しかし、潤が亡くなつた当時と現在の、それぞれの状況を知つてみれば納得がいつた。当時ハマクアでは浄土宗の布教が始まつていたが、潤が暮らしたホノカアではどの宗派の布教活動もまだなかつた。そのため墓は、隣町のハマクアに作られたのだ。

また現在のハマクア浄土院は、わずか十人ほどの信徒、しかもマサ同様高齢者ばかりで維持・管理されている。一方、ホノカア本願寺の信徒数は多く、毎年の供養会を実施するには動きやすいわけである。盆ダンスの櫓を持たない寺が宗派

の違う近隣の寺から借りるというように、寺どうし、日系人どうしが助け合う例は島内に多い。潤の墓を再建するときには、大勢のボランティアが宗派を問わず集まつたという。「信者にとつて潤は阿弥陀様」だと、ある寺のご住職が仰つていたので、この場合は、潤への強い思い入れに動かされた面も大きかつたらうとは思ふ。

(2)

日本からハワイへの集団出稼ぎについて短く紹介しておきたい。出稼ぎは明治元年から始まつているが、元年の場合は江戸幕府がハワイ王国と結んだ契約であつたため、スタートしたばかりの明治政府の許可が下りなかつた。そこで、仲介人ベン・リードなる人物の見切り発車で出港したのが、元年の出稼ぎであつた。元年者と呼ばれる人たちである。国策としての正式な移民は、明治十八年（一八八五）の第一回ハワイ移民からになる。その第一回移民でハワイ王国に渡つたのは、九四六人。二十三歳の後藤潤が、その中にいた。

当時のハワイは、サトウキビ・プランテーションでの働き手を欲しがつていた。

日本以外に中国、フィリピン、ポルトガルからも出稼ぎ労働者が渡つたが、現地で支払われる給料には出身国によつて差があった。雇い主であるアメリカ人はポルトガル人を有用し、プランテーションの労働管理をさせて給料も多く支払つた。しかし、アジアからの労働者、特に日本人とフィリピン人は低賃金であつた。経営者によつては待遇や給料が多少良いプランテーションもあつたらしいが、多くの日本人労働者は過酷な条件のもとで働かされてゐた。元年者から十八年後の移民達を待ち受けていたのは、そんな現実であつた。雇い主達が望んだのは、重労働にも低賃金にも文句を言わず黙々と働く人間だつた。移民達がいかに貧しかったかは、死亡者数の多さからもうかがい知れる。第一回、第二回移民の場合で見ると、渡航後九年でおよそ十人に一人が亡くなつてゐる。

とつ的事件へとつながつていくのである。その事件を取りあげるにあたり、後藤潤の人物像から触れていこうと思つた。一八六二年（文久二）、現神奈川県大磯町に、小早川家の長男として生まれてゐる。幼い頃から学業優秀で村役場に勤めていたが、後藤家の養子になつて移民に応募した。後藤夫妻はまだ三〇代であつた。二十三歳の潤が養子になつたのは、長男である彼が移民募集に応募するため手段だつたのではないかと推測される。ホノルル（オアフ島）到着後、後藤夫妻はカウアイ島へ、潤はハワイ島のサトウキビ耕地へと別れた。

渡航前から、潤は英語が話せたようだが、横浜で外国人から習得したという説もあるが、理由ははっきりしない。ともかく、その後の彼の活動からみて、英語を使いこなしたのは間違いないところである。

労働契約期間の三年が終わると、彼は島の北東部に位置するホノカアの町で雑貨店を開いた。耕地労働者の身で大金を貯めていたとは考えられないから、開業には多額の借金をしたのだろう。しかし、彼は勤勉であつた。また商才もあつたの

だろう、店は繁盛をする。日本人客はもちろん、白人もハワイアンも来店するようになつていく。

ホノルルでは、貧しさへの不満等から自堕落になり、賭け事や酒色に溺れる出稼ぎ人達が出たという。手取り早く稼ぐために、身を売る女たちもいたそうだが、ハワイ島にはホノルルのような大きな町はない。享樂的な環境のなかつたことが、潤の幸いだったのか。いや、そうは思わない。なぜなら、彼は労働契約が終了する前に、日本にいる弟をサンフランシスコの学校に留学させているからだ。わずかな収入の中で金を貯め、目標をもつて過酷な労働に耐えた証明である。向こう見ずで利那的な生き方はしない人間だつたと分かる事実でもある。地位と権力をもつ白人から差別を受けても、彼は不屈の向上心をもつて生きようとしたのだ。

(3)

さて、事件は一八八九年（明治二二）、十月二十八日の深夜に起きた。後藤潤が暗殺されたのだ。死体は電柱に吊り下げられた。

当時ホノルルで発行されていた「デイ

リー・パシフィック」紙の十月三十一日号に、事件が報道されている。

『二十九日午前六時、日本人小売店経営者K・ゴトウは、ホノカア刑務所から百ヤードほど離れた電柱に宙づりになっているのが発見された。二インチのロープは殺害目的で購入されたものと思われる。手足が縛られ、左耳下に首つりの結び目が施されていたことから、あきらかに手慣れた者の犯行である。』

ハワイ島に生活する日本人を、震え上がらせる大事件であったと推察される記事である。

その後、五人の白人が逮捕送検された。うち四人は四年から九年の重労働刑の有罪判決を受けたが、二年も経たぬうちに五ヶ月の減刑になる。さらに、主犯ミルズは恩赦となって、仕事に復帰した。彼は潤の雑貨店の隣で、同じく雑貨店を開いていた人物である。

潤はなぜ殺されたのか。それを知るには裁判記録を照査すべきなのだろう。そこで、ハワイ大学マノア校がネット上に公開している「ハワイアン・ガゼット」紙を参考にした。事件翌年の五月二七日

付けで、「ホノカア殺人事件」と題して三ページにわたたり、裁判での尋問と供述を報道している。被告の口から犯行時の詳細が語られているが、たいへん残酷で胸の悪くなる内容である。潤の人間性を探る手立てになるものではないので、ここには取りあげない。それ以外で分かったのは、以下の点である。

犯行の主導者になったミルズは、店舗経営のほかにホテルの経営者でもあり、かつホノカア郵便局長、特別警察官、公証人の肩書きを持っていた。その上、プランテーション耕地の所有者でもある。いわば、土地の権力者だった。

いっぽう潤は、プランテーション労働者のための商店経営を精力的にこなし、顧客を増やしていた。隣で、しかも同業の雑貨店を経営するミルズにとって、潤は商売仇になったわけだ。

潤は、日本人出稼ぎ人の給与や環境の改善を求めて、プランテーション経営者に掛け合うことをいとわない。彼の英語力を頼ってくる日本人達のためには、経営者に対しての交渉に乗り出していく、耕地所有者としてのミルズにとつても、

潤はこれまた邪魔な人物であったのだ。邪魔者は消せ、である。傘下の者を使い、残忍なる手段で暗殺したのだ。後藤潤、享年二十七歳。契約労働を終えてからわずか二年目の無念の死であった。

ところで今回（二〇一九年三月）のハワイ島訪問では、日本を発つ前にホノカア本願寺の古澤住職に連絡を取っていた。古澤師はホノルルに転動していたが、後任のブルス・ナカムラ師に連絡を取ってくれた。そのおかげで、ナカムラ師から思いがけない冊子を見せてもらうことになる。

『ザ・ストレンジ・ケース・オブ・カツゴトウ』と題する三十七ページの薄いものだが、潤の事件だけを取りあげた文献でこれだけまとまったものに出あったのは初めてだった。内容は、潤殺害にかかわった者達の経歴から始まり、事件の背景、裁判、その後、と続く。筆者はアラン・ピークマン。新聞記者を経て日本人移民史の学者になった米国人である。発行年は明記されていないが、一九八四年と推測できる記述が本文中にある。

この冊子によると、潤の暗殺は耕作地

で起きた火事が、直接の引き金になって  
いる。

一八八九年十月十九日、あるプランテー  
ション耕地で火事が発生した。潤が殺さ  
れる十日前である。この耕地の出稼ぎ人  
達は、無給での残業を強いられていた。  
プランテーション経営者は、労働に不満  
を持つ者による放火と判断し、七人の日  
本人に嫌疑を掛けた。捜査官はその七人  
から事情聴取するために、通訳として潤  
を召喚する。

ところが、この時の潤の態度にプラン  
テーション経営者が腹を立てたといふ。  
どんな態度を潤が取ったのか、冊子には  
記述がない。私の想像になるが、潤は労  
働者の肩を持ち労働環境を非難したの  
はなからうか。その鼻っ柱の強さに経営  
者と白人達が立腹した、といったところか。  
経営者側は、容疑者とされた七人が二  
十ドルずつの弁償金を払うことで決着を  
付け、容赦する。しかし、月七ドルほど  
の賃金しかない労働者にとつて、二十ド  
ルもの大金はどういれ払える額ではなかつ  
た。そこで彼らは、潤に相談をする。

事件当日の夜、七人の居留地に出かけ

て相談を受けた潤は、話し合いを終えて  
帰路についた。その道で潤は絞首され、  
見せしめのごとく電柱に吊り下げられる  
のである。

(4)

さて、ハマクア浄土院のマサに話を戻  
そう。彼は内陣の裏手から、額に入った  
A四サイズほどの写真を取りだしてきた。  
鼻の下に髭を置き、落ち着きのある風貌  
の男が写っている。潤だ。マサは写真を  
膝にのせ、椅子に腰を下ろすと思ひ出語  
りを始めた。

「学校で潤を教わったことはなかった。  
でも、お母さんは潤の話をよくした」

一世たちの時代の苦勞と、苦しさに負  
けない強さ。仏様がみているから悪いこ  
とをすれば罰があたる。マサのお母さん  
は、そんな話を交えながら潤を語って聞  
かせたと言ふ。

マサのお母さんは、彼の年齢から考え  
ると潤と同時代に生きてはいない。両親  
か祖父母から潤の話が聞かされたに違  
ない。その話を、子どものマサにも語り  
継いだのだ。私の祖母も母も、よく自分  
の子ども時代の話をしたものだ。内容を

覚えているのに、私はそれを我が子に伝  
えたことがない。この違いは、どこから  
生まれるのだろうか。

マサを訪ねた三月、私はハワイ島内に  
ある日本の寺巡りをしていた。廃寺になつ  
た三寺のほかに、各宗派あわせて二十九  
寺ある。その多くは現在無住であるが、  
兼務の僧はいる。日常は、マサのような  
信徒が管理をしている。

ハワイ島における日本仏教の布教は、  
一八八〇年代から始まった。耕地で働く  
日本人を対象としたので、寺のある地域  
はサトウキビプランテーションがあつた  
地域と重なる。寺と信心は、困苦の中  
にいる日本人の心の支えになった。寺院の  
土地は、プランテーション所有者から提  
供されたり安く貸し出されたりする場合  
があつた。それは、不満を持つ日本人に  
謀反を起こさせないために、宗教で気持  
ちを安定させようとする経営者側の苦渋  
の策であつたようだ。

現在、どの寺のご住職も、寺の歴史は  
もちろんのこと、かつての移民の生活の  
ようすにも詳しい。文書で調べたり、信  
徒さん達から聞いたりして学んだそうだ。

現在の信徒は三世から八世まで様々だが、移民当時の苦勞を体験している人はもういない。それなのに、当時の生活のようすを誰も語れる。それは、祖先の努力が代々語り継がれてきたからだ。

プナ本願寺の富岡智史（さとし）師の車で、僻地とよばれるカウ地区へ出かけたときのこと。そこは島内最後のプランテーションがあった地域だ。日本の四国の約半分に相当する面積をもつ広大なハワイ島で、濶が暮らしたホノカアからは一番遠い位置にある小村だ。富岡師は、倉庫のような建物内にある布教所で、信者さん達に会う機会を作ってくれた。元年者を曾祖父にもつアリスさん、442部隊の生き残りのイワオさん（九十六歳）、プランテーションで四十五年働いたサカタさん夫婦たちだった。彼らが持参した古い写真や地図を囲んで、昔のプランテーションや暮らしの様子を聞かせてもらった。そのおり、後藤濶の名前が出た。「日系人で、濶を知らない者はいない」と。島の中心となる町から最も遠く交通不便なカウ地区に住む人も、百年以上昔のできごとを知っていたのだ。

ハワイ島に移り住んで年数の浅い日本人でも、私が彼の名前を出せば知らない人はいなかった。ハワイ島まで行つても濶に関する資料は少ないと分かったが、日系人たちは彼を忘れてはいないことも分かった。ホノカアでは供養会を開いているし、顕彰会を立ち上げた人々もいる。さらに、濶の生涯をビデオや映画に作成しているグループもある。

日系人が後藤濶を忘れないのは、過去を忘れてはいけないという強い思いからだ。忘れてはいけない過去とは、差別を受けたことへの恨みではない。悔しさでもない。日系人の心のあり方であり精神的励みであると、とらえるのが正しいだろう。

ハワイ日系人センター館長、アーノルド日浦さんの言葉を思い出す。

「日系人センターの展示は、移民はつらかったと示しているのではありません。センターの活動は、祖先の努力と精神を現代の若い世代に伝えていくことです」

過去のドラママチックな人物として濶に関心を抱いていた私を、恥ずかしくさせる言葉だった。

ハワイ島の日系人に語り継がれる後藤濶は、単に悲劇のヒーローではないのだ。彼を語るのは、残酷な昔話としてではなく、困難に立ち向かう彼や祖先達の精神性を再確認するためのものだ。確認したものを、自らの精神にしみこませようとしているのだらう。濶は彼らの精神的なシンボルとしてあるのだ。

アメリカ人のマサの顔を、じつと見つめた。この人にも、困難を乗り越えてきた祖先の、たくましさと誇りが流れているのだ。

マサはほほえむと、欄間を見上げた。「コアの一枚板を彫ったもので、裏と表とがちがう模様になっている。柱も仏具もこの建物も、全て祖先の手作り」

そう言うと、膝の上の濶に視線を落とす。

「日本人は偉かった。なかでも濶は英雄だ」マサは、濶の写真の内陣裏にもどした。私は自分の思いを言葉に表現できなくて、「ありがとう」ばかりを繰り返していた。

別れ際、差し出された手をぎゅっと握ると、マサは痛いほど強い力で握り返してきた。厚い手の平と、太い指。日系人

の心に今も生きる後藤潤が、マサの手から伝わってくるのを私は感じていた。

〈参考資料〉

『ハワイ日本人移民史』

ハワイ日本人移民史刊行委員会編

(1964)

『THE STRANGE CASE OF KATSU GOTO』

Allan Beekman 著 (1984)

『ハワイ出稼人名簿始末記』

山崎俊一著 日本放送出版協会

(1985)

『JAPANESE BUDDHIST TEMPLES IN HAWAII』

George J. Tanabe and Willa Jane Tanabe 著

ハワイ大学出版会 (2013)

『The Hawaiian gazette 新聞』

(TUESDAY, MAY 27, 1890, Page 1, 3, 7)

ハワイ大学マノア校提供の画像

『元年者たち』

佐野純一著 山手書房 (1982)

『The Lynching of Katsu Goto』

GAVILORD C. KUBOTA 著

ハワイ大学労働教育センターHP